

り寄せて是を栽培しましたが、如何しても花を開いて結實する事が出来ません、色々と考えた結果、土を取り寄せて栽えました所が始めて結實したので遂に「根瘤バクテリア」の有用なる事の解つたのであります、歐州にも苜科の植物が無い事は無いのでありますから土壤中に含まれて居ない事は無い筈です是から推しても各別の種には別々の「バクテリア」の居る事が了解せられませう、そして又此「バクテリア」が必要でなくてはならぬものである事が解せられ様と思はれます。

君子人に異る所以のものは其心を存するを以てなり。
君子は仁を以て心を存し、禮を以て心に存す。
仁者は人を愛し、禮あるものは人を敬す。
人を愛するものは人恆に之を愛し
人を敬するものは人恆に之を敬す。
(孟子)

思出ひのまゝ

双葉女学校 幼稚園保母 後 藤 りん

○一月の二十五日であつた、此日は天気朗かであつたが、非常に寒さを感じた、みんな會集から戻つて来て保育室に這入りますと、暖爐の周圍を残りず取りまき、それで種々の話を初めた、丁度前日が日曜であつたものですから、其日の中で最も面白かつたこと、つまらなかつたこと、嬉しかつたこと、悲しかつたこと、或は怖かつたこと、寂かつたこと、などを、さも得意顔に、話して居ります、それで、全身が暖まりますと、そろ／＼自分達の好む所に從て、活動を初めます、何時もなら、直に外にとび出すのでありますが、此日は除程の寒さを感じたものと見え、室内にて机の下や、廊下を匂ひまはり犬や猫の眞似をする、すると、外の組までが、出掛けて来て、それに手傳つて椅子で周圍を圍つてやる、それで理想の動物園が出

來上つた、園丁も出來るし、種々の贈物も這入て
 「ブー〜モー〜」と鳴いて居ります、それを今
 度はズロ〜と引き出して遊びに出掛る、かと思
 へば歸つて來る、御飯を喰べさせる、するかと思
 へば檻の戸を堅く占め込む、すると中の暗い處
 で、犬や猫が小さくなつて踊んで居る、それはそ
 れは其状態の面白さと云ふものは側の者をして思
 はす腹を抱へて笑はせる、すると又此方の一團は
 何時の間にか叔母様ごとを始めてゐる是亦理想の
 家庭を造つて赤ん坊、カーチャン、ゴアン、マード
 母今ニニシテ、アゲマスカラ、マツテ入ラツシ
 ヤイ」なぞとやつて居る、するかと思ふとお姉様
 に連れられて買ひ物から、散歩やらに出掛る、彼
 處の方では、の組が電車や汽車の眞似ことで、あ
 たり人無き如くに走り廻つて居る、車掌の聲色、
 運転手の眞似、果ては旗振り信號の眞似までする
 出マスヨ、………チン〜、………動キマース：
 ……ドツ前ノ方へオツノヲ願ヒマス」なぞと言

つて先きの叔母機連を乗せてやる、すると叔母機
 連は講所乗り廻はしてから、或る停留所で下車ま
 して、さも大人氣な、口をき〜、歸つて參り
 ます「姉チャン、アンヨガ、痛クナツタノ」と言
 ひますと「ア、ヨチ〜」と自分と同じ様な、子を
 脊負つて、どちらが歩いて居るのやら薩張分らぬ
 風をして、よた〜と戻つて來る、肩掛を懸け居
 るもの、頭巾を被り居るもの、扱ては大きな風呂
 敷包を持った御女中さんや、實以て腹の皮を捻る
 やうなこと許り、嗚呼、此天真爛漫なる兒童が常
 々遊び居るにも、自然幼を愛し、長に従ひ弱き
 を助け、強きを挫き、白から社會の現象を表は
 し、知らず識らず、己の思想を發露して、活動し
 て居る、其状態に日々接して居る、保姆の愉快さ、
 思はず、心身をして恍惚たらしめます、又個性の
 觀察は此際を以て、一番能く知ることが出來ます。
 〇三の組の各幼兒が唱歌の一つ二つを誦じてはつ
 くと歌ひはじめた頃であつた、今日は各兒の好

みにまかせ二つ三つ歌ひ終りし後更に一人づ、呼び出して、其幼兒の望みにまかせ、何んなりと、あなた方の好む唱歌を歌つて御覽なさい、と言ひましたら之に對する幼兒の所作の面白さ愛らしさと云ふものは實に筆紙には寫し出すことの出来ぬ趣味を感じました、すまし込んで、したり顔に歌ひ終るものもあれば過半歌つて逃げ出すものあり、頸のみ振りて歌はぬもの、處々大きな聲を出すかと思へば末は小さな聲に終るもの、顔に紅葉をちらして、口の内で何にか歌つて居るもの、又楓の如き手を顔に推し當て、恥かしさうに逃げ出すもの、はては頭を掻くもの、お髯を掻くもの、着物を引張るもの、保母の顔ばかり視て羞むもの、半ば歌つて、先生に嘸りつくもの等、それはく様々の容子をして、傍に見て居る人々の顔を解かしめました、兎にも角にも人馴れて怖めず臆せず一人出て来て、一番うまく歌ふて、衆人に賞められ様と思ふが如き勇氣は到底家庭のみの保育では

出来ないことのやうに感じました。

○あまり年不相應な難事を仕込まざるやうにした、幼兒は何事にもするなと言ても、做したがる本能性がありますから、放任して置ても、知らず識らずの中に自然に發達いたします、あゝ危険、あゝ、じれつたいと思ふ事とがあつても、暫時、黙して自身に經驗さして、自ら通曉やうにありたい、勇氣、忍耐、及獨立等の精神修養は此間に於て最も深く兒童に印象し紀念せらるゝものであります。

○世間には子供が或る惡戯をしたからとて、大に叱つたり打擲したりする人がありますが、これは子供にとつて甚だ慘酷な仕方だと思ひます、子供は四五才位までは是非善惡の差別を知りませんが、これをすれば善いのか、悪いのか、痛いものか、危いものか、と云ふ識別がつかぬのであります、それゆゑ、斯様な子供のある内では最初から側の者が氣を附て、毀してならぬものは仕舞つて

費さ、怪我を仕さうなものと想つたら、片附け置
 き、子供をして成るべく、其意思のまゝに、活潑
 に、運動の出来るやうにしてやりたいと思ひます、
 これは家庭ばかりではありません、幼稚園などで
 も随分設備の不完全なる所では、まゝ、見ることに
 あるのです、破つてならぬもの、毀してならぬも
 の、採りてならぬもの、乗つてならぬものと言つ
 て、片つ端から制止して、丁度犬の前へ旨い匂ひ
 のするものを置て、お預けだよと言つて何時まで
 も、ぢらして居るやうなことをするのは、まことに
 罪な仕方だと思ひます。
 ○我儘は飽まで制止すべし、古人云ふ「父母の子
 を愛するは自然の宜しきを得たるものなれども、
 道理を以て支配せざれば愛に溺るゝの恐れあり、
 愛に溺るゝ時は兒童の體質多く之が爲にやぶらる
 と」何事も寛容の内に威嚴を備へ一言にして服従
 するやうに躰けられたし、世の父母たるもの、往々
 目前の愛に溺れ、遂に此子はどうして斯う親の云

ぶ事を聞かぬだらうと、嘆聲を發せらるゝに至る
 のであるが、是は抑々其當初に於て聊かの我儘を
 漸次助長された結果に外ならないのです。

○兵法に奇兵正兵と云ふことがあるが、訓練上の
 方法にも、自ら奇正と云ふやうな區別があるかと
 思ふ、一つ二つの例を言つて見やうなら、人は食
 事の際に子供に向つて「御飯ヲコボシテハイケマ
 セン」と云ふのが通例なのである、實に其通りで
 宜いのである、それを「ナニ、コボシテモ、イ、」
 と云ふ、なせなれば、こぼし〜喰べてみなけれ
 ば何時までも上手に喰べることは出来ません、又
 よく人は子供に向つて「ソソナ亂暴シテハイケマ
 セント」と云ふ、それを「思ヒ切テ活潑ニ遊ベ、
 ヨク遊バヌ兒ハ馬鹿ニナル」と斯様なことを言ひ
 ますと初めて來た兒の附添人などは吃驚するであ
 りませう、併し正面から教へるよりは、所謂奇道
 を以て、反面から教へる方が、家庭の反省を促す
 便宜ともなり、場合に依つては、大層効能がある

のであります、これはあまり極端論でありますが、其實おもに附添人を教育する方便なして、今の日本の家庭には別して効力があります。

危険々々と云つて子供を不活潑になし、筋肉の運動を十分ならしめざる結果、遂にひよろ／＼の役立すの人間を造るやうになる、子供は活動的のものでありますから、或る程度までは十分自由にやらせる方が宜しいです、そして遣り損つては自分で自分を教育する「ルーン」曰く「エミールガ」傷かす苦みの何たるを知らず成長するを悲む」とある共に極端な言ひぐさであります、何麼も世中があまり形式的に傾くと斯様なことが言ひたくなるのです、併し日露戦争此の方一般實利主義に傾くやうになつて来て大に悦ばしいことであります、先達て一寸私が或る私事の會に参りましたら、其内に一人突然に君は學校の先生だつて、君をつかまへて斯んなことを言つては失敬かもしれませんが、僕は一體此節の學校教育の、やり方は氣

に喰はん先づ一寸言て見たところで衛生だ／＼なぞと云つて、子供に向つて何を言ふかと思へば硬いものは喰つてならぬ、やれ、これは不消化物だ、それ、そんな、ことをしては健康に害があるとか言て教へるものだから、青白い、ひよろ／＼の人間ばかり澤山できる、嗚呼、もー、これからの國民には日露戦争の様な、めざましい戦は出来ないだらう、……僕だつて戦争を好むと云ふのでは無い……全體このこと許りじやない、總ての遣り口が氣にいらぬのだと、すこしく酩酊の氣味であつたから随分語氣は鋭くあつた、併し私も此人にまけない極端な方でありますから、私も實に賛成なのですと答たら君も賛成なら、ぐづ／＼して居らないで十分やつて呉れ給へと言ひ放たれて、あと茫然と考へて居つた、なせなれば私は先生と云ふは名のみであつて教育者の末席にも這入ることの出来ぬ人間である、何麼して世の人の耳目を傾聽させるやうなことが出来やうかと審慮したのであ

つた、所で、先日（せんじつ）のフレーベル會（くわい）に元良勇次郎（もとらゆうじろ）先生の御演説（ごえんげつ）を伺（うかが）ひましたら、殆（たいてい）どこれと符合（ふあ）したやうなことを述べられた、其時（そのとき）に總て世中（よなか）のことは何（なに）んでも斯（あ）したものである、個人（こじん）で如何程（いかほど）やきもき思（おも）ひましても世（よ）の趨勢（せいせう）をまたなければ改良（かいりやう）進歩（しんぷ）と云（い）ふことは却々（かくな）困難（くわんなん）であると或（ある）る先生（せんせい）から言（い）はれたことがある、水（みづ）を器（うつわ）に入れても、初（はじ）めは漸（ぜん）時（じ）動搖（どうごう）して居（ゐ）りますが、遂（つい）には水平（すいへい）を保（たも）つが如（ごと）く、物事（ものごと）極端（ごくたん）から極端（ごくたん）にはしつこしまへば、今（いま）度は中庸（ちゆうちゆう）にをさまる、實（じつ）に自然（じぜん）なもので五六年（ごねん）前（まえ）には私の説（わたくしのせつ）があまり極端（ごくたん）であると笑（わら）はれて採（と）りあげられなかつたことが、今（いま）では殆（たいてい）ど其説（そのせつ）に傾（かた）ひてまつた、そこで此（こ）の度（たび）は中庸（ちゆうちゆう）にをさまらうとしてつまり日本國民（にほんみん）に適當（あた）なる教育（けいいく）の方針（かみさし）が見出（みいだ）されんとしつゝある、當時（たうじ）世（よ）の教育（けいいく）に心を傾（かた）けらるゝ方々（かたがた）が、子女（しご）の教育（けいいく）に益々（ますます）注目（ちゆうもく）せらるゝ様（よう）になり、日に（ひ）に（改）良（かいりやう）進歩（しんぷ）を見るやうになりましたのは、實（じつ）に悦（よろこ）ばしいことであると思（おも）ひます、何（なに）んとも、

をこがましい、申（まを）すやうでありますが熱心（ねつしん）のあまり、つひ筆（ふで）がすべりました。

○能（よ）く世間（よかん）の母親（おとこ）の申（まを）さるゝ言葉（ことば）に「オツカナイ者（もの）」を一人（ひとり）拵（こしら）へ置（お）かなければ、子供（こども）が云（い）ふことを少しも肯（う）かぬと、是（こゝ）は大（おほ）いに誤（あや）まつて居（ゐ）るのであります、オツカナイモノ」などを拵（こしら）へ置（お）かすとも、子供（こども）が柔順（じゆうじゆん）に服從（ふくじゆう）するやうに饒（な）げられたい、一體（いったい）今（いま）までの母親（おとこ）たる方々（かたがた）は、多言（たごん）の上に、言行（げんかう）が一致（いちじ）しないからいけません、母親（おとこ）たるだけの威嚴（おごげん）を備（そな）へ、寡言（くわごん）にして言行（げんかう）は一致（いちじ）にし、子供（こども）の我意（ががい）は少しも通（と）じさせぬと云（い）ふ、意志（いし）を堅固（けんこ）に、そして家庭（かてい）は些細（せさい）の事柄（ことづから）にでも、表裏（へうり）なきやうなされば決して「オツカナイ者（もの）」などは一人（ひとり）もいらす、子供（こども）は只（ただ）の一（ひと）べんで直（な）つてしまひます。

君子（くんし）に人の美（み）を成（な）して人の惡（あく）を成（な）さず。小人（せうじん）は之（これ）に反（さか）す。

（論）